同じ、武藏國には調布を玉川にさらして、貢物にも奉りしゆへ、此邊麻田なるべし、延喜式萬葉集の歌にものする所なりと、是等の說皆文字にもとづきての牽强にして、その據をゑらず、又麻生山善福寺の傳へに、かの山へ往昔麻のふりし事あるゆへ、麻布留山といひしを、中略して麻布山と唱へしより、後年廣き地名となれるなどもいへり、これは殊に甚しき附會の說なり、○中略江戸古圖には、麻生村をのす、又北條分限帳にも、江戸廻り阿佐布五十三貫二百文の地、狩野大膳亮領せしよしみゆと、今案に、正保頃の鄕帳に阿佐布村高七百四拾五石餘內四百二十八石餘、伊奈半十郎御代官所、百三十七石餘、山王領六十六石餘、大養寺領五十八石餘、天德寺領三十八石餘、神田明神領十六石餘、柴明神神明の誤なるべし領屋敷四町五反八畝拾五步、上ヶ屋敷伊奈半十郎御代官所、外高拾石善福寺領と載せ、元祿改の鄕帳には、高二百九十六石餘阿佐布町、高拾壹石餘阿佐布町の枝鄕坂下町と出せり、正保の頃七百四十五石餘なりしを、元祿改に二百九十六石餘と有しは、此際拜領屋敷寺地など多く置れしゆへなるべし、今麻布の在町を合せて、その地域をいはゞ、東南は大抵麻布新堀川に限りて三田に對し、川向に麻布の飛地少しく在り、川の手前に三田の飛地少しくあり、こは新川成し時、村界に拘らずして堀割あり、故なり、北は飯倉赤坂に續き、西者澀谷靑山に境へり、

飯倉

〔御府內備考八十四飯倉〕此地は、飯倉村とて、ことに古き地名にて、又廣き村なりとみへし、○中略江戸古地圖にも飯倉村あり、北條役帳に、飯倉彈正忠某といへるもの、此地を三貫八百七拾文領せしよしみゆ、この彈正忠が家、世々この所の領主として、その地の名により、飯倉を氏とせしなるべし、又太田新六郎某も、同じ比飯倉內小早川十四貫文の地を領せしよし、北條役帳にいづ、○中略すべて西久保芝神明邊なども、飯倉のうちなりしとみえ、政隨錄に、飯倉西久保石河藏人町屋敷など記し、神明を飯倉神明ともいへり、今は飯倉町六町、飯倉狸穴町、飯倉片町、飯倉永阪町等の飯倉の名殘りて、芝麻布西久保の間に挾れる地名となれり、